

創作能・万葉集より 「書持」 について

令和5年2月 有田百代

流行り病のおかげで実家への帰省を逃し、さみしき紛らわせようと万葉集に救いを求めたのは、昨年のお正月休みのことでした。1年が経つのは、あっというまです。コロナの性質も徐々にわかりはじめた頃、取り残した想いを取り戻そうと、よく働き学び遊びの1年でした。あの頃のセンチメンタルな気持ちは何処へ。幽玄の世界とは少しばかり遠い、賑やかな日常です。そろそろ、あの美しく儂い時間を過ごしてみようと、万葉集を手にとると。そこには「大伴家持」が妻^{をみなめ}を亡くし、悲しみのなかに作る歌がありました。

卷3 462

「十一年己卯。夏六月に、大伴宿禰家持の亡りし妻を悲傷びて作れる歌」より
『今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を宿む』

卷3 464

また、家持の砌の上の瞿麦の花を見て作れる歌一首
『秋さらば見つつ思へと妹が植えし屋前の石竹咲きにけるか』

卷3 465

月移りて後に秋風を悲しび嘆きて家持の作れる歌一首
『うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み思ひつるかも』

……………「また、家持の作れる歌一首併せて短歌」

……………「悲緒いまだ息まず、また作れる歌 五首」

……………あれ。なぜでしょう。

読んでも読んでも。

悲しみのなかにいる家持の心情が、私のなかに入ってこないのです。

家持の父・大伴旅人が、妻を亡くした悲しみを詠った歌が、巻3にあります。

「吾妹子が植えし梅の木見るごとにこころ咽せつつ涙しながら」

この一首を読んだだけでも、旅人の心情がこちらの心に入り込み、追体験してるかのごとく、涙が後から後から溢れてきました。他歌も然り。意図せぬ間に、自分と対象の境界がわからなくなるほど、作品に没頭できた瞬間。私は、和歌の世界に浸る喜びを感じます。

家持の亡りし妻を悲傷びて作れる歌が、

父・旅人のそれと違い、共感できぬ理由はどこにあるのかと、

不思議に思ったことを、市瀬先生にお尋ねし、アドバイスをいただきました。

「確かに、家持の亡き妻への歌は、お父さんの旅人には及ばないですね。

旅人60代だったのに対し、家持は若干20代です。

人生の経験の重みが違いますね。でも、妻を亡くした悲しみを、

なんとか歌に残そうとした、若い家持の努力の姿が浮かんできませんか？

若い家持を見守ってあげる心持ちで、再度読まれてみてはいかがでしょうか」

そういう優しい見方がありましたか！

歌才高く、非の打ち所のない、遠い憧れの存在のような大伴家持にも

若かりし模索の時代はあったのだと改めて知った時、

親近感を覚えると同時に、家持の人間的な魅力に出逢えた気がしました。

家持はここから、どのように成長してゆくのでしょうか。

その変遷が万葉集の歌にあらわれていないだろうか、辿ること数日。

出逢いました。

家持の心情が、ありありと私の胸に迫りくる歌にです。

それは、若くして亡くなった、たったひとりの弟。

「大伴書持」への想いを詠ったものでした。

巻17 3958

「真幸くと言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも」

命無事と云ってきたものを白雲となって立ちたなびくと聞くと

悲しいことよ

巻17 3959

「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを」

こうなろうと前から知っていれば、越の国の海辺の、荒磯の波も

見せたかったものよ

父も母も早くに亡くし、後ろ盾ない家持にとっての書持は、病弱であっても頼りになる、たったひとりの弟でした。書持の歌を辿ると、時に兄の家持が、やりきれぬ情の時には、それを晴らせるように導こうとする意図がみえたり、家持の気持ちを想い、寄り添う様子がみえたりと、兄を支えようとする謙虚な優しい性格が、そこにあらわれていました。

「 我、書持無くして、何者でなし。
我、書持無くして、何も成せぬのや。」

かけがえのない弟を亡くしてしまった家持の、あまりにも心細い気持ちが私の胸に入り込み、思いがけず、この言葉が口から出てきました。何とかして家持をここから救いたい、そして彼がここからどうやって再起し成長を遂げたのかを知りたくなりました。

市瀬先生の教えてくださった通り、気がつくと、家持の成長を見守ろうと、作品作りに没頭することができていました。

創作能～万葉集より 「書持」

前シテ 少年（書持の亡霊）

後シテ 大伴書持の亡霊

ワキ 大伴家持

真幸くと 言ひてしものを白雲に 立ちたなびくと 聞けば悲しも

見上げた蒼空に流れくる、この白雲は。
遙か遠く、佐保の山から流れ着いたものなのか。
我が最愛の弟、書持がもたらしたものなのか。
涙が後から後から溢れでる。

書持よ。我が最愛の弟、書持よ。
そなたは真にもう居らぬというのか。
二度とその顔を見ること、叶わぬのか。

そなた無くして、我、何者でなし。
そなた無くして、我、何も成せぬのや。

助けてくれぬか書持。なあ書持よ。
何も手につかぬのや。
そなたは、いついかなる時も
不器用な私の心を汲んで、助けてくれたではあるまいか。

わしのこの鬱血の緒を救うのは、そなたしか居らぬ。
書持よ 書持よ 戻ってきてはくれぬか 書持よ。

長逝せる弟を哀傷びたる歌一首併せて短歌

天離る 鄙治めにと 大君の 任のまにまに 出てて来し 吾を送ると
青丹よし 奈良山すぎて 泉川 清き川原に 馬とどめ 別れし時に 真幸くて
吾帰り来む 平けく 齋ひて待てと 語らひて 来し日の極み 玉梓の 道をた遠み
山川の 隔りてあえば 恋しけく 日長きものを 見まく欲り 思ふ間に
玉梓の 使の来れば 嬉しみを 吾が待ち問ふに 逆言の 狂言とかも
愛しきよし 汝の弟の命 何しかも 時しはあらむを はだ薄穂に出る秋の花 萩の花
にほへる屋戸を（言ふところは、この人、人となり 花草花樹を好愛でて、
多く寝院の庭に植う。故に花薫へる庭といへり）
朝庭に 出で立ちならし 夕庭に 踏み平げず
佐保の内の 里を行き過ぎ あしひきの 山の木末に 白雲に 立ちたなびくと
吾に告げつる （佐保山に火葬せり。故に、佐保の内の里を行き過ぎといへり）

天遠い鄙を治めるためにと、大君の任命に随って出発して来た私を送るとて
弟は青丹美しい奈良の山を過ぎ、泉川の清らかな川原に馬をとどめて別れた。
その時「無事に私は帰ってこよう。元気でいて祈りながら待っていてくれ。」
と語り合ったが、その日を最後として、玉梓の道は遠く、山川が隔たっているので
恋しく思う日も長く、逢いたいと思っている間に、玉梓の死者が来たので、
嬉しいことと待ち受けて聞いてみると、不吉なたわけ言と言おうか、
愛しい我が弟は、どうしたのか時もあるうのに、はだ薄が穂に出る秋の萩の花が
咲き誇る家を（意味するところは、この人の性質が草花を愛し、たくさん母屋の
庭に植えた。そこで「花咲き誇る庭」というのである。）
朝の庭に出でたつこともなく、夕べの庭を踏み平にすることもなく、佐保の内の里を
遠ざかり、あしひきの山の梢に、白雲となってたなびいていると、私に告げたことだ。
（佐保山に火葬した。そこで「佐保山の内の里を遠ざかり」といった。

真幸くと 言ひてしものを白雲に 立ちたなびくと 聞けば悲しも
命無事でと言つて来たものを白雲となって立ちたなびくと聞くと
悲しいことよ

かからむとかねて知りせば越の海の 荒磯の波も見せましものを

越中守として赴任中の大伴家持は、
会えぬままに亡くした弟・大伴書持の突然の訃報から立ち直ることが出来ず。
空虚な気持ちを胸に、ふらふらと海岸へ向かう。
岸辺に腰掛け、荒い波間を、ただただ眺めていた。
気づくと、
そこに、齢にして十ほどの少年が立ちすくんでいた。

「そなた。ここでひとりきり、何をしておる」

「はい。兄さまに。

兄さまに、届け物をしようと参ったのですが、どこにもおりませぬ。
探しても、名を呼んでも届かず。心細うございます。」

「そうかそうか。それは、さぞ心細かろう。

こういう時は、動かぬ方がよい。

しばらく兄さまが現れるのを一緒に、ここで待つか。お座り。

そなたは、兄さまが好きか」

「はい、好きでございます。

父上と同じほどに、尊敬しているお方でございます。」

「そうか。そなたの兄さまは、どのようなお方じゃ」

「はい、とても頼もしゅうお方でございます。

いつも私を心配し、守ってくださいます。」

「兄弟とは、いいものよのう。わしにも弟がおる。」

「そうなのですね。弟さまは、どのようなお方でございましょうか。」

「そなたによく似た風貌での。

人の気持ちのよくわかる、優しく利発な弟であった。

ただ、体が弱かったものでのう、わしがいつも守っていた。
けれども、今にして思えば守られていたのは、わしの方じゃ。
いつもいつも弟の言葉に頼り、励まされていた。
今、それに気づいた。
遅かった。今ごろにそれを知ったところで、弟はもうおらぬ。」

「もういらっしゃらぬのですか」

「すまぬすまぬ、このような話を。そなた不思議な子やのう。
なぜだか、つい話をしてしまう。
そなたをみていると、弟を思い出す。
弟も、そなたのような眼で、わしの話をいろいろ聴いてくれたものじゃ。
そうしていつの間にか、わしの心は穏やかになったものよ」

「嬉しゅうございます。弟さまのこと、お聞きしとうございます。」

「そうよのう。思い出すのは良きことばかり。
あれは昔、宴の席のこと。皆で、黄葉を詠おうとなった。
五人・六人続くうち、話題もなくなり、いかに続けてよいものかと、
皆が思うた、その時じゃ。弟が詠った。

～あしひきの 山の黄葉今夜もか 浮かびゆくらむ 山川の瀬に～

自由に、想像の景で作った見事な歌じゃ。
そこから、皆は大いに心ひらき、のびのびと理想の黄葉の世界を作り上げた。
眩しい金色輝く世界が目の前に、うわあとあらわれるようであった。
今でも、あの楽しい時が思い出されることよ。
弟は周りの気をよみ、場を和ませ、人の心を優しく包むものであった。」

「素晴らしい弟さまです。私も弟さまのようなお人になりとうございます。」

「なれるとも。どうかどうか、兄さまを助けてくだされぞ。頼みましたぞ。」

「そうじゃ。先ほどの話。橘のお方さまの宴での出来事であった・・・
そなた。なぜだか、先ほどから不思議とよい香りがいたすのう。
懐かしき香り。橘か。」

「はい、橘の実でございます。

私の兄さまは、ほととぎすが好きでございます。

兄さまを喜ばそうと、ほととぎす舞い込むようにと、橘を庭に植えました。

初めて実りました。兄さまに早くお見せしたくて。

私は、兄さまのお役に立てる時が、ととてもとても嬉しゅうございます。」

「さようか。聞けば聞くほど不思議なものよ。

わしも、ほととぎすは好きでう。

そして我が弟も、花の庭愛する者であった。」

「そうなのですね。心優しきお方なのでございますね。

お方さまにも、おひとつ。お渡ししようございます。」

そういうと少年は、家持に橘の実を手渡し、歌を詠った。

『～橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日なけむ～』

「そなた。その歌・・・」

「あちらの方で、父上の呼ぶ声がいたします。行って参ります。」

「ひとりで大丈夫なのか」

「はい。大丈夫でございます。」

「そうか、またよのう」

「はい」

先ほど少年が詠んだ歌は、自分の聞き違いか・・・

心の寂しさ少しまぎれた家持。

蒼い空眩しく目を細めると、この度の疲れがでたか、ずっと意識が遠のく。

少しばかり横になろうと、眠りにつく。

<中入り>

目が覚めた。あたりを見廻す。

暮れゆく空、書持がいない現実到我にかえり、心寂しくなった家持は歌を口ずさむ。遠い昔、妻を亡くした際に残した歌であった。

思えばあの時も、書持は自分を心配し、見守ってくれていた。

～今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を宿む～

あの頃のように。返してくれぬか。書持よ。

背後から懐かしき声がした。

～長き夜を独りや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに～

振り向くとそこに、弟・書持の姿があった。

「書持。まことか。とうとう逢いにきてくれたか、書持。」

「兄さま、ようやくお目にかかることができました。書持でございます。

植えた橘に、初めて実がついたのでございます。

嬉しくて、早く早くお見せしたくて、お持ちしました。」

「そうか、そうか。」

「ええ、ええ。

兄さまを探して、探して。やっとお会いできました。」

「そなたは、いついかなる時でも、わしを思って元気づけてくれたものを。

それに比べ、わしはそなたに何をか、してやれたらどうかと

今はただただ悔いてならない。

そなたを連れ、真の景色を、もっと見せてやればよかったと」

「いいえ兄さま。それは、ちごうございます。

今、こうして越前の海を、私に見せてくださっているではございませぬか。

外に出ること叶わなくとも私は、兄さまがお持ちくださる、
外の世の出来事を、兄さまを通してお聴きすること。

それが、何よりもすばらしい時でございました。

覚えておられますか。大宰府での生活を。

母さま亡くなり、心寂しい時ですら、兄さまのおかげで私は強くいられました。

私はあふちの花を見ると、母さまを思い出します。

～妹が見しあふちの花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに～

まだまだ幼きふたりで覗いた、父上の梅花の宴。

それはそれは雅でございましたね。素晴らしい時でございました。

のちに二人で追和いたしましたね。

お父さまにならった私の歌、覚えておられますか。」

～わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも～

～御苑生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と降りけむ～

どうか覚えておいてください、兄さま。

鬱屈とした想いは、いつまでも続くことはございませぬ。

咲いた梅の花散ったとて、寂しく思うことございませぬ。

心の愁いおさまらぬ冬には、落花と共にその想い、天に投げかけてください。

兄さまの想い、届いた印にお父さまと私で雪を降らせましょう。

家族思い出し、心細いその時は、あふちの木を見上げてください。

私がお母さまと風吹かせて、その花を降らせましょう。

心騒がしき夏ならば、橘の木をご覧ください。

私がほととぎすとなりて、兄さまのお心ませることにいたしましょう。

金色輝く黄葉の道を歩く秋、私は兄さまのお隣におります。

私は、いつも兄さまとともに。

～珠に貫くあふちを家に植えたらば山雀公鳥離れず来むかも～

～ほととぎすあふちの枝に生きて居ば花は散らむな珠とみるまで～

～家持・書持 兄弟の舞～

書持の姿、既にそこにはなく。

季節外れの一羽のほととぎす。

「橙橘初めて咲きほととぎすかかけりなく。
この時候に対ひてなにそ志をのべむ。」

微笑んだ家持はこういと、声高らかに歌を歌った。

『ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し来鳴きとよむ』

ほととぎす飛び去る。

辺りには、橘の香りが芳しく漂っていた。

関連する歌

卷17・3958 大伴家持

「真幸くと言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも」
命無事でと言ってきたものを白雲となって立ちたなびくと聞くと
悲しいことよ

卷17・3959 大伴家持

「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを」
こうなろうと前から知っていれば、越の国の海辺の、荒磯の波も
見せたかったものだ

ほととぎすを詠める歌二首 大伴書持

卷17・3909

「橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日無けむ」
「橘はいつまでも咲き続ける花であってほしい。
ほととぎすが住もうとやって来て鳴くなら、毎日聞くことだろう」

卷17・3910

「珠に貫くあふちを家に植えたらば山ほととぎす離れず来むかも」
ほととぎすが珠として貫ぬくあふちの花を家に植えたら、
山ほととぎすはいつも来るかなあ。

橙橘初めて咲き、ほととぎすかけりなく。この時候に対ひて、
なにそ志をのべざらむ。よりにて三首の短歌を作りて、鬱結の緒を
散らさまくのみ。

卷17・3911 大伴家持

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の間立ちくき鳴かぬ日はなし
あしひきの山辺にいるとほととぎすが、木の間を潜って
鳴かない日はない。

卷17・3912

ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる
ほととぎすはどういうつもりなのか。
橘の花を玉に通す月にこそやって来て鳴き響かせるとは。

卷17・3913

ほととぎすあふちの枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで
ほととぎすがあふちの花の枝に来て止まったなら花は散るだろうなあ。
玉かと思えるほどに。

右は、四月三日、内舎人大伴宿禰家持、久にの京より弟 書持に
報へ送れり

卷5・798 山上憶良

妹が見しあふちの花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに
妻の見たセンダンの木は落花の気配を見せる。悲しみの我が涙もまだ乾かないのに。

卷5・822 大伴旅人

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも
我が庭に梅の花が散る。天涯の果てから雪が流れてくるよ。

卷17・3906（追ひて大宰の時の梅花に和へたる新しき歌）大伴書持

御苑生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と降りけむ
御苑のたくさんの梅の木の落花が天に飛びあがり雪と降ったことだろうか。

あとがき

本来の夢幻能の構成は、彷徨う魂としての「シテ」が、現世を生きる「ワキ」と出会い、対話を続けることで、シテが想いを残した本来の自分の存在に気づき、魂の浄化とともに、あの世へ帰りゆくのが通常の形です。ワキが己を語ることはありません。

ひたすら魂の存在であるシテに問い続け、その言葉に耳を傾けます。それが、未練残る魂の念を救い、成仏へと繋げる行為だからです。この話では、ワキである「大伴家持」が彷徨える魂の弟「大伴書持」の語りに耳を傾け続けていく進行が、本来の能らしい構成のはずです。

けれども、書き進めていくと、いつの間にか「シテ」と「ワキ」の立場は逆転、想いを話すワキ「家持」と、それを聴くシテ「書持」となってしまいました。ひとえに書持の兄を想う優しさが、そうさせたのでしょうか。

家持の言葉に耳を傾け、その鬱屈とした想いを昇華させることができた書持は、安心して姿を消します。そこに残るは一羽のほととぎす。病弱ゆえに身動きとれなかった書持も、自由に羽ばたいてほしい気持ちを込めました。時に家持の鬱血の緒の時には、書持はほととぎすとなって、家持の心を慰めに来てくれるでしょう。

また、兄弟の歌に出てきました「あふち」を調べるとそれは可憐で優しい雰囲気醸し出す花であることがわかりました。まるで兄弟を天から見守る母のような存在に思えました。

「あふち」は大宰府で妻を亡くした兄弟の父、旅人の為にその気持ちを慮った山上憶良によって歌われています。

～妹が見しあふちの花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに（巻5・798）～

「あふち」の花は兄弟にとって、優しい母の象徴なのでしょうか。こうしていろいろな植物たちに心和ませ救われて、人たちに見守られ助けられ、家持は成長を遂げてゆくのでしょうか。万葉集完成の日まで、私も見守り続けます。

